

心に立ち返れ

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-10-19 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 出村, みや子 メールアドレス: 所属:
URL	https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/24785

「心に立ち返れ」

大学宗教主任 出村 みや子

ルカによる福音書、第二〇章三八―四二節

38 一行が歩いて行くうち、イエスはある村にお入りになった。すると、マルタという女が、イエスを家に迎え入れた。彼女にはマリアという姉妹がいた。マリアは上の足もとに座つて、その話に聞き入っていた。40 マルタは、いろいろのもてなしのためせわしく立ち働いていたが、そばに近寄つて言った。「主よ、わたしの姉妹はわたしだけにもてなしをさせていますが、何ともお思いになりませんか。手伝つてくれるようにおっしゃってください。」41 主はお答えになった。「マルタ、マルタ、あなたは多くのことに思い悩み、心を乱している。42 しかし、必要なことはただ一つだけである。マリアは良い方を選んだ。それを取り上げてはならない。」

夏休み明け最初の授業を行ったクラスで出席を取りながら、学生にどんな夏休みだったかを一言ずつ言ってもらいました。主に一年生が出席するクラスでしたので、大学最初の夏休みをどの

ように過ごしたのか興味があつたからです。自動車学校に通つて免許をとつた学生、友人や家族、あるいは一人旅といった学期中にはできない体験をした学生、サークルやアルバイト、美術館巡りなど夏休みを有効にアクティヴに過ごした学生が多い中で、取り立てて何もしなかつたという学生も何人かいました。彼ら、彼女らはそれぞれ夏バテでした、引き籠つてました、あるいはオリンピック中継に熱中しすぎて昼夜逆転し、生活リズムがすっかり狂つて昼に何も活動できませんでした、など言い訳めいたことを言つたのですが、むしろ普段と変わらず平常心で日々を過ごしていました、と語つた女子学生もいて、それぞれの夏休みを垣間見せてもらいました。

ちょうど教会史の中のアウグスティヌスを取り上げる授業だったこともあり、活動的な生活だけでなく、何もしない引き籠りも時に人生には必要なことを示すために、アウグスティヌスの書いた『告白』という著作の一節を紹介しました。それはアウグスティヌスが真理を探究している場面で、真理はどこに存在するか、と問うた有名な箇所です。彼はそこで、「真理は心の最も奥深くにおいて味わわれる。しかるに心はそこから迷い出てしまった。道を踏み外した者たちよ、心に立ち返れ。汝らを創造した方に依りすぎりなさい」(IV.1218)と述べています。アウグスティヌスは他の箇所でも繰り返し「心に立ち返れ」と読者に告げているのです。

「心に立ち返ること」、このことはキリスト教主義を建学の精神とする本学の大学礼拝において

も重要であると思います。今日選びました聖書の箇所は、主イエスが親しく関わったマルタとマリアという名の二人の姉妹の話で、「心に立ち返る」ことの大切さを教えてくれる箇所のひとつです。簡潔な表現ながら、当時の情景が生き生きと私たちの心に迫ってくる物語です。マルタとマリアの住む家に主イエスがおいでになった。出来る限りのもてなしをしようとして心を砕くお姉さんのマルタに対して、部屋に入ったイエスの足元に座って何もせずに語られる言葉にじっと耳を傾ける妹のマリアのいる場面の対比が大変印象的なのですが、こうした場面は大切な来客を迎えた家庭の日常の光景としてわたしたちの記憶にも残っているのではないのでしょうか。みなさんはかつて、幼稚園や小学校時代にあつた家庭訪問の日や特別な来客があつた日のことを思い出しませんか。

この対比的な二人の姉妹が登場する場面は他にもあります。ヨハネ福音書一章に収録された、有名な「ラザロの死と復活」の物語では一章二〇節で「マルタはイエスが来られたと聞いて、迎えに行ったが、マリアは家の中に座っていた」と語られています。またヨハネ二二章の有名な「ナルドの香油」の物語にも、「イエスのためにそこで夕食が用意され、マルタは給仕をしていた」と活動的なお姉さんのマルタについて語られる一方で、マリアの方はその後高価な香油の入ったナルドの壺を持って来て、主イエスの埋葬の準備のために黙ってその足に香油を注いでいます。こ

のように福音書の幾つかの場面において、人の性格がはっきりと描き分けられていますので、そのためにこの二人の姉妹については古来よりしばしば対照的な女性像の典型として語られてきました。マルタが積極的な行動派の女性であるのに対して、マリアは物静かなタイプの女性である。実際にこの物語は西欧中世世界では活動的な実践的生である *Vita activa* と、観想的生 *Vita contemplativa* を対比したアレゴリーとして理解されるようになりました。

男女平等が進む現代社会にあつては、来客のもてなしは必ずしも女性の役割ではなくなりつつありますが、イエスの時代のユダヤ社会においては、大切な来客の接待は、かつての日本のように女性の役割とされてきました。「多くのことに思い悩み、心を乱している」ことを指摘されたマルタの姿は、ストレスに満ちた忙しい日々を生きる現代の私たちにも通じるところがあります。その意味でマルタは世の常識や規範を重視する生真面目な女性であつたのでしよう。しかし妹のマリアは、大切な客人の接待という、当時の女性に期待されていた役割を放棄してまで、ただイエスの足元に座つてそのみ言葉に聞き入る姿勢を崩さなかつたのです。このひたすらなマリアの姿勢は私たちの心を打つものですが、しかし生真面目なマルタはそのような妹の常識はずれな態度を許すことができず、思わず主イエスにまで不満をぶつけてしまいました。「主よ、私の姉妹は私だけにもてなしをさせていますが、何ともお思ひになりませんか。手伝つてくれるようにおつ

しゃってください」と。これは私たちの日常によく聞かれる表現ではないでしょうか。

「がんばる」は時に「我を張る」に通じ、がんばっている人は往々にしてそうでない他の人を非難しがちです。自分はこのなにごんばっているのに、どうして周囲の人は協力してくれないの、という訳です。このように取り乱したマルタに対して主イエスは優しく語りかけます。「マルタ、マルタ、あなたは多くのことに思い悩み、心を乱している。しかし必要なことはただ一つだけである。マリアは良い方を選んだ、それを取り上げてはならない」と。このイエスの言葉は決して叱責の言葉ではなかったでしょう。おそらくは「良い方を選んだ」と言われたマリアにとつてばかりか、忙しさに自分を見失いそうになっていたマルタ自身にとつても主イエスの優しい言葉は、自分の心に立ち返り、周囲から期待されていた役割から解放される自由への招きとなったことでしょう。

今日の聖書を読むうちに、かつて私が大学生だった時の大学礼拝の中で一人の牧師が、「忙しくて祈らずにいられない」という題で話されたことを思い出しました。日本語で「忙しい」という言葉は動詞の「いそぐ」に由来し、漢字で（立身偏の）心をじくすと書きます。確かに忙しい日々を送る現代日本社会の中で、すぐにキれる人や心の病にかかる人が増えています。その後クリスチャンとなって、この牧師の言葉の意味が次第に良くなってきました。信じる者は時間的余裕

があるから礼拝を大切にし、日々祈る生活を続けているのではないのだということです。むしろ多くの社会的責任を負う忙しい日々の中で、「しかし必要なことはただ一つである」という主イエスの言葉に立ち返ることで初めて自分を取り戻し、他者をも思いやることができるということを知っているのです。

これからの皆さんのキャンパスライフにおいて、忙しさに自分を見失いそうになった時、心が疲れた時、どうぞパイプオルガンの音に癒され、「心に立ち返る」静かな時がキャンパス礼拝において備えられていることを覚えていただきたいと思います。